

他者共在場面における課題遂行と要求水準、 課題への関与度、帰属の関連について

磯崎 三喜年

黒石 憲洋

問題

一般に、比較的単純な課題における遂行と要求水準の関連については、実際の遂行が要求水準を上回った場合には次回の要求水準をより高く設定し、逆に遂行が要求水準を下回った場合には次回の要求水準をより低く設定することが示されている (関, 1974)。

また、要求水準に関しては、個人の性格特性との関連も指摘されている (帆足, 1961)。特に、自尊感情の高いものは実際の課題成績を上回る目標を設定し、自尊感情の低いものは実際の課題成績を下回る目標を設定することが示されている (磯崎・黒石, 1998)。さらに、自尊感情はポシブル・セルフ (Markus & Nurius, 1986) という概念を媒介として、ある種の固執性との関連が指摘されている (磯崎・黒石, 1998)。このように、要求水準は個人の特性と密接に関連している。

では、課題の質は、要求水準とどのように関連するのだろうか。この疑問に対しては、Tesser & Campbell (1982, 1983) の自己評価維持 (self-evaluation maintenance: SEM) モデルが重要な示唆を提供している。SEMモデルによれば、ある課題における実際の遂行レベルと当該課題の自己にとっての重要性 (関与度: relevance) の認知とは、相互に密接に関連しているとされる。自己

の遂行レベルが相対的に高い場合には、自己にとってその遂行の持つ意味は大きく、そうした課題は自己にとっての関与度が高い（重要である）と認知されやすい。逆に、遂行レベルが低い場合には、そうした課題の自己にとっての関与度（重要性）を下げようとすると考えられる。これは、人が基本的に自己のよさ、あるいは自己評価の維持を志向しようとしているからに他ならない。また、関与度が高いと要求水準を比較的高く設定し、課題に対して意欲的に取り組み、結果的に関与度が課題成績に影響することも示唆されており、また、実際に関与度と課題成績、あるいは要求水準の間にある程度の関連が示されている（磯崎・黒石、1998）。

この他、課題成績を規定する要因として個人の帰属スタイルが挙げられる。Seligman (1991) によれば、オプティミスト（楽観主義者）は、学業、スポーツ、仕事など、さまざまな遂行場面において成功しやすいとされている。楽観主義者とは、失敗経験に際して特定の説明スタイルを示す人々、すなわち、失敗経験について外的、可変的、特殊的な帰属をする人々をさす。

帰属と関与度の関連についてはどうだろうか。Peterson, Semmel, von Baeyer, Abramson, Metalsky, & Seligman (1982) では、帰属と抑うつとの関連を検討する際、出来事の（個人にとっての認知された）重要性という観点が考慮されている。この研究では、帰属と抑うつとの関連は重要な出来事においてのみあらわれる、あるいは、重要でない出来事に比べ、相対的に重要な出来事の方により強くあらわれるとの仮説が設定された。しかしながら、結果は、帰属—抑うつ間の相関は重要性という変数を媒介として一貫した傾向を示すものではないことが示された。すなわち、帰属と遂行それ自体には関連が示されているものの、帰属と出来事的重要性（関与度）の間には関連は見出されていない。

したがって、帰属と要求水準の関連については、関与度との関連とあわせ再検討する必要がある。また、個人場面での要求水準の設定と実際の課題遂行、およびその課題への関与度についての検討はなされているものの、実際の課題遂行そのものは、他者が存在することによって影響されることが明ら

かにされている（例えば、Zajonc, 1965）。また、この点については、多くの研究と説明理論が提出されている（宮本, 1993参照）。また、他者存在による実際の遂行の変化に伴って、要求水準の設定や、課題に対する関与度も影響を受けると推測される。

ここでは、磯崎・黒石（1998）を踏まえ、他者が共在する場面で、個人の課題遂行と要求水準、課題への関与度、帰属との関連についてより詳細に検討することにする。本研究では、課題遂行場面における他者存在とその他者との比較可能性という観点から、他者共在状況の基本であると考えられる3者場面（例えば、Hunt & Hillery, 1973）を取り上げ、この3者場面において比較的単純な課題を遂行することによって、そこでの課題遂行と要求水準、課題への関与度、帰属の関連について見ていくことにしたい。

仮説は、これまでの研究から以下のように設定した。

仮説1. 課題成績と要求水準の間には関連がある

仮説2. 課題成績と関与度の間には関連がある

仮説3. 要求水準と関与度の間には関連がある

仮説4. 楽観主義者は悲観主義者よりも高い課題成績を示す

仮説5. 帰属と関与度の間には関連がない

ところで、関与度については、そのときどきでの状況即応的関与と、比較的永続的な長期的関与とが考えられる。現実場面における「関与度」は、これらが相まったものといえる（Bloch & Richins, 1983）。したがって、本研究では同一被験者における一定期間（1か月）経過後における関与度についても測定し、状況即応的関与および長期的関与と課題遂行や要求水準、帰属との関連を併せて検討する。

方法

被験者 国際基督教大学学部生・大学院生12組（3人一組）計36名（男性

6名、女性30名)。ほとんどの場合、被験者同士は互いに顔見知りあるいは友人同士であった。

実験器具 被験者用として、大小分類検査器（竹井機器工業）、質問紙、筆記用具（各被験者に対してそれぞれ1つずつ）。実験者用として、ストップ・ウォッチ、結果記録用紙、筆記用具。

課題 本研究においては、遂行課題として大小分類検査を用いた。この課題は、視触覚弁別検査とも呼ばれ、利き手で大きさと厚さの異なるメタル（全50個）を一つづつつまみ、箱の穴（メタルの大きさに対応して長さや幅が異なる）に入れるという課題である。この課題を用いて、時間制限法（制限時間1分間）によって作業量の測定を行い、全50個のメタルのうち何個の遂行が可能と思われるかを尋ねた。（一般的な被験者では、全てのメタルを時間内に入れるのは不可能であった。）

要求水準の測定に関しては、一般的な要求水準とされている期待水準「どのくらいできると思うか」（高木、1958）をその指標として用いた。また、教示の方法は佐治（1951）による期待水準の教示を参考にした。具体的な教示は、「これから行う課題であなたはどのくらい成功すると思いますか。最低0個から最高50個までの間でお答えください。」とし、回答用紙に記入させた。

課題成績（箱に入ったメタルの数）のカウントに関しては、他者共在場面の影響を明確にするため、被験者自身に数えさせ、結果を口頭で実験者に報告させた。具体的な教示は、「それでは、箱の側面の蓋を開けてコインを取り出して、いくつ入ったかを数えてください。数え終わったら、順番に報告してください。」とした。

質問紙 本研究では、フェイス・シートを含め、4ページからなる質問紙を独自に作成した。

第1ページ フェイス・シート。研究の主旨説明および研究協力の要請を行った上で、被験者の性別・年齢を記入させた。また、以降の回答方法に関する教示を行った。

第2ページ 課題実施前の課題に対する関与度を測定する項目。7件法に

よる両極性尺度3項目を独自に作成した。具体的には、「興味がある」、「おもしろい」、「得意である」の3項目である。

第3ページ 予想結果記録用紙。要求水準に関しては、課題でどのくらい成功すると思うかを最低0個から最高50個までの間の個数により期待水準を求めた。

第4ページ 課題成績の帰属および課題実施後の課題に対する関与度を測定する項目。課題成績の帰属に関しては、まず課題の主観的達成度を「あまりよくできなかった」から「自分なりによくできた」までの7件法により求めた上で、帰属スタイル質問紙 (ASQ) (Peterson, et al., 1982) と同様の項目を実施した。項目の内容は、課題成績の原因を自由回答によって求め、その内在性、安定性、普遍性をそれぞれ7件法により求めるものである。具体的には、自由回答によって求めた課題成績の原因に関して、

「他の人やまわりの状況—自分自身」

「次は影響しない—また影響する」

「この課題だけ—他の課題でも影響する」

かを、7件法により求めるものである。また、Peterson, et al. (1982) では付加的に、状況(課題の結果)の重要性を「まったく重要ではない」から「きわめて重要だ」までの7件法により求めており、本研究もそれにしたがった。また、課題実施後の課題に対する関与度に関しては、課題実施前の関与度の項目(第2ページ)に準じた。

なお、課題実施1か月後の課題に対する関与度を測定するため、3項目からなる1ページの質問紙を別途作成した。具体的な項目の内容は、課題実施前の関与度の項目(第2ページ)に準じたものである。国際基督教大学内のメール・ボックスを通じて個別に配布し、実施した。

手続き 3者共在場面において実験を行った。実験者は、被験者を控え室に待機させておき、3人の被験者が揃った時点で実験室に案内した。被験者にフェイス・シートを記入させた後、以下のような教示を行った。

「それではいまから大小分類検査を行っていただきます。この課題は、視覚

および触覚による物の大きさの弁別と分類作業の速さを検査するものです。まず、利き手ではない方の手で箱をしっかりと押さえてください。“はじめ”の合図があったら、利き手でコインを一つづつつまんで、箱の穴に入れていってください。50個のコインがありますので、1分間の間にできるだけ速く、できるだけ多くのコインを箱の中に入れるようにしてください。なお、一度に複数のコインを持たないように、必ず一つづつ手にとって穴に入れるように注意してください。」

続いて、課題実施前の課題に対する関与度の測定を行った。以下、要求水準の測定と課題の遂行を繰り返し、計5回行った。その後、課題成績の帰属および課題実施後の課題に対する関与度を測定し、実験を終了した。さらに、被験者をアイデンティファイしておき、課題実施1か月後に再び課題に対する関与度を追跡調査した。

したがって、実験手順をまとめると以下のようになる。

フェイス・シートの記入

教示

課題実施前の関与度の測定

要求水準の測定および課題の遂行（第1回）

要求水準の測定および課題の遂行（第2回から第5回まで繰り返し）

主観的達成感および帰属の測定

課題実施後の関与度の測定（実験終了）

1か月後の関与度の測定（質問紙により個別に追跡調査）

結果

要求水準に関連する指標について

ここでは、要求水準に関連しては、要求水準と目標差スコア（GDスコア）

を取り上げた。GDスコアは、第 $n-1$ 試行における成績 (A_{n-1}) から第 n 試行における成績を予想させたとき、その予想成績すなわち要求水準 (G_n) と A_{n-1} との差をいう。GDスコアは、前試行の成績に比べて要求水準が上昇したか下降したかを示すものである。

尺度の検討

関与度質問項目の項目識別力および α 係数を表 1 に示した。課題実施前および課題実施後については、全被験者から有効回答が得られた ($n=36$) が、課題実施 1 か月後の測定においては、一部の被験者から有効回答を得ることができなかった ($n=20$)。

表 1 関与度質問項目の項目識別力および α 係数

	課題実施前	課題実施後	実施1か月後
興味	.834**	.853**	.713**
おもしろさ	.803**	.728**	.732**
得意さ	.331*	.401**	.557*
α 係数	.368	.372	.250

* $p < .05$ ** $p < .01$ (無相関検定による)

項目数が少ないため、 α 係数は全般に低くなっている。また、得意さに関する項目は他の項目よりも項目識別力が低くなっている。しかしながら、ここでは、関与度という概念を内容的に「興味」、「おもしろさ」、「得意さ」に関する認知の総体であると考え、関与度の指標として3項目の平均得点を用いた。

実際の課題成績に基づく結果の分析

ここでは、実際の課題成績の指標として、全試行の合計得点の順位に基づいて被験者を3群に分け、これらをそれぞれ高成績群 ($n_h=12$)、中成績群 ($n_m=13$)、低成績群 ($n_l=11$) とした。この群分けは、各試行における順位の頻度に基づいた群分けとほぼ対応するものであり、客観的な課題成績の指標として有効であると判断した。以下の分析は、この指標を用いて行った。

高成績群・中成績群・低成績群における課題成績の推移、要求水準の推移、GDスコアの推移をそれぞれ表2-1、表2-2、表2-3に示した。

表2-1 高成績群・中成績群・低成績群における課題成績の推移

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	平均
高成績群	24.2 (3.51)	27.0 (3.19)	28.6 (3.09)	29.8 (2.26)	29.7 (3.92)	27.8 (2.69)
中成績群	20.6 (3.53)	23.1 (2.60)	25.8 (2.94)	26.1 (3.40)	29.0 (2.94)	24.9 (2.11)
低成績群	18.6 (2.80)	20.5 (2.34)	24.5 (3.27)	24.0 (3.87)	25.5 (3.48)	22.6 (1.93)

表2-2 高成績群・中成績群・低成績群における要求水準の推移

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	平均
高成績群	20.3 (6.51)	26.5 (4.58)	27.4 (3.34)	29.2 (3.59)	29.8 (2.42)	26.6 (3.36)
中成績群	17.4 (6.86)	23.5 (5.44)	24.3 (3.04)	27.2 (3.11)	27.7 (3.45)	24.0 (2.87)
低成績群	18.3 (7.85)	22.1 (2.55)	23.3 (3.50)	25.6 (3.47)	25.3 (3.88)	22.9 (2.85)

表2-3 高成績群・中成績群・低成績群におけるGDスコアの推移

	第1回	第2回	第3回	第4回	平均
高成績群	2.3 (2.46)	0.4 (2.02)	0.6 (1.98)	0.0 (2.22)	0.8 (1.70)
中成績群	2.8 (3.53)	1.2 (1.48)	1.4 (1.85)	1.6 (1.66)	1.8 (1.65)
低成績群	3.5 (2.12)	2.8 (1.99)	1.1 (2.34)	1.3 (2.90)	2.2 (1.78)

表2-1より、課題成績の推移に関しては、いずれの群でも徐々に上昇している。さらに、一部の例外はあるものの、各群の課題成績の差は比較的一貫して推移している。

表2-1および表2-2より、課題成績と要求水準は同じような推移を示しており、課題成績と要求水準(ともに全試行の平均値)の相関係数は、 $r=.810$ (無相関検定において1%水準で有意)であった。

表2-3より、高成績群では中成績群・低成績群に比べてGDスコアが低くなっている。

関与度に関する結果の分析

高成績群・中成績群・低成績群における課題実施前の関与度、課題実施後の関与度、課題実施1か月後の関与度の推移を表2に示した。

表3 高成績群・中成績群・低成績群における関与度の推移

	課題実施前	課題実施後	実施1か月後
高成績群	4.8 (1.01)	5.4 (0.67)	5.4 (0.44)
中成績群	4.2 (0.64)	4.7 (0.83)	4.4 (1.09)
低成績群	4.5 (0.80)	4.8 (0.75)	5.0 (0.88)

表3より、概して課題実施前の関与度よりも課題実施後の関与度の方が高くなっており、高成績群では中成績群・低成績群に比べて関与度が特に高くなっている。また、課題実施前の関与度、課題実施後の関与度、課題実施1か月後の関与度と実際の課題成績(全試行の平均値)との相関はそれぞれ、 $r=.204$ 、 $r=.288$ 、 $r=.118$ であった。

また、要求水準と関与度の関連について、相関係数を算出した。課題実施前の関与度、課題実施後の関与度、課題実施1か月後の関与度と要求水準の

相関はそれぞれ、 $r=.272$ 、 $r=.369$ 、 $r=.302$ であった。これらのうち、課題実施後の関与度と要求水準の相関は、無相関検定において5%水準で有意であった。

帰属に基づく結果の分析

ここでは、帰属スタイル質問項目の3項目に基づいて被験者を2群に分けた。すなわち、帰属スタイル質問項目の3項目について、全て平均値以上を得点したものを悲観主義群 ($n_p=7$)、全て平均値以下を得点したものを楽観主義群 ($n_o=5$) とした。

悲観主義群・楽観主義群における課題成績の推移、要求水準の推移、GDスコアの推移をそれぞれ表4-1、表4-2、表4-3に示した。

表4-1 悲観主義群・楽観主義群における課題成績の推移

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	平均
悲観主義群	22.0 (4.93)	24.4 (4.58)	26.6 (4.61)	28.4 (3.10)	29.7 (4.11)	26.2 (3.16)
楽観主義群	19.6 (6.07)	23.2 (5.66)	25.6 (5.68)	24.8 (6.06)	30.2 (5.50)	24.7 (5.37)

表4-2 悲観主義群・楽観主義群における要求水準の推移

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	平均
悲観主義群	21.7 (6.24)	25.1 (5.15)	26.1 (4.10)	27.9 (4.30)	29.1 (3.34)	26.0 (3.50)
楽観主義群	19.0 (7.42)	24.6 (4.51)	26.2 (4.55)	28.2 (5.36)	27.2 (5.72)	25.0 (3.67)

表4-3 悲観主義群・楽観主義群におけるGDスコアの推移

	第1回	第2回	第3回	第4回	平均
悲観主義群	3.1 (1.46)	1.7 (1.89)	1.3 (0.76)	0.7 (0.49)	1.7 (0.60)
楽観主義群	5.0 (1.87)	3.0 (2.00)	2.6 (2.07)	2.4 (1.14)	3.3 (1.36)

表4-1より、悲観主義群では楽観主義群に比べ、概して課題成績がよい。また、悲観主義群と楽観主義群の課題成績の差は次第に縮まる傾向にあり、特に第5回では、楽観主義群の課題成績と悲観主義群の課題成績とで差が見られない。

表4-2より、悲観主義群と楽観主義群には要求水準の推移に顕著な傾向はみられない。

表4-3より、悲観主義群は楽観主義群に比べてGDスコアが低くなっている。

悲観主義群・楽観主義群における課題実施前の関与度、課題実施後の関与度、課題実施1か月後の関与度の推移を表4-4に示した。

表4-4 悲観主義群・楽観主義群における関与度の推移

	課題実施前	課題実施後	実施1か月後
悲観主義群	4.4 (0.76)	5.7 (0.58)	5.4 (1.57)
楽観主義群	4.8 (1.15)	4.9 (0.94)	5.3 (1.30)

表4-4より、概して課題実施前の関与度よりも課題実施後の関与度の方が高くなっている。また、課題実施後の関与度では、悲観主義群の方が楽観主義群に比べてやや関与度が高くなっているものの、課題実施1か月後の関与度はほぼ同程度になっている。

その他の結果の分析

ここでは、主観的達成度を指標として、平均得点を基準として被験者を2群に分け、これらをそれぞれ高達成感群 ($n_h=21$)、低達成感群 ($n_l=15$) とした。

高達成感群・低達成感群における課題成績の推移を表5-1に示した。

表5-1 高達成感群・低達成感群における課題成績の推移

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	平均
高達成感群	21.3 (4.10)	24.3 (3.86)	27.0 (3.59)	27.6 (3.78)	28.7 (4.13)	25.8 (3.21)
低達成感群	21.0 (3.85)	22.5 (3.50)	25.5 (3.11)	25.4 (3.92)	27.4 (3.27)	24.4 (2.72)

表5-1より、課題成績の推移に関しては、いずれの群でも徐々に上昇している。さらに、一部の例外はあるものの、各群の課題成績の差は比較的一貫した形で推移している。

また、高成績群・中成績群・低成績群における主観的達成度・状況の重要性を表5-2に示した。

表5-2 高成績群・中成績群・低成績群における帰属スタイル質問紙の結果

	主観的達成度	状況の重要性
高成績群	4.9 (1.68)	3.3 (1.44)
中成績群	4.8 (1.36)	3.4 (1.56)
低成績群	3.6 (1.56)	2.8 (1.33)

表5-2より、高成績群・中成績群では低成績群に比べて主観的達成度が高くなっている。また、高成績群・中成績群では低成績群に比べて認知された状況の重要性もやや高くなっている。しかし、実際の課題成績（全試行の平均値）と主観的達成度との相関は $r=.269$ 、認知された状況の重要性は $r=.193$ であった。

ここでは、認知された重要性を指標として、平均得点を基準として被験者を2群に分け、これらをそれぞれ高重要感群 ($nh=16$)、低重要感群 ($nl=20$) とした。

高重要感群・低重要感群における課題実施前の関与度、課題実施後の関与

度、課題実施1か月後の関与度の推移を表5-3に示した。

表5-3 高重要感群・低重要感群における関与度の推移

	課題実施前	課題実施後	実施1か月後
高重要感群	4.4 (0.95)	5.2 (0.77)	5.2 (0.79)
低重要感群	4.6 (0.76)	4.9 (0.81)	5.0 (0.90)

表5-3より、認知された重要性と関与度の間に顕著な傾向はみられず、課題実施前の関与度、課題実施後の関与度、課題実施1か月後の関与度と認知された状況の重要性との相関はそれぞれ、 $r=-.058$ 、 $r=.295$ 、 $r=.124$ であった。

考察

実際の課題成績および要求水準について

表2-1より、課題成績の推移に関しては、いずれの群でも徐々に上昇しており、課題成績の推移にはある程度学習の効果がみられた。

表2-1および表2-2より、課題成績と要求水準は同じような推移を示しており、課題成績と要求水準の相関も、 $r=.810$ と高くなっている。このことから仮説1は支持され、課題成績と要求水準の間には強い関連があることが示された。この結果は、要求水準に関する先行研究（関，1974など）とも一致している。

表2-3より、高成績群では中成績群・低成績群に比べてGDスコアが低く、高成績群の被験者は中成績群・低成績群の被験者に比べて現実的な予測を立てる傾向がある。これは、他者共在の影響も考えられる。中成績群・低成績群の被験者は、自己の課題遂行レベルだけでなく、高成績群の被験者の課題遂行をも考慮に入れて競争的な要求水準を立てがちとなる。互いに顔見

知りであることは、そうした可能性を強めるように思われる。そのため、GDスコアが高くなると推測される。逆に、高成績群は、他者よりもよくできているため、余裕を持って、いくぶん謙遜気味に要求水準を立てていたということも考えられる。

関与度について

表3より、概して課題実施前の関与度よりも課題実施後の関与度の方が高くなっていることが示された。実際に課題に取り組んだことによって課題に対する関与度が上昇したと推測される。特に、高成績群は、中成績群・低成績群よりも課題実施後の関与度が高くなっている。しかし、課題成績が中および低の群でも関与度をあげる傾向にあり、関与度と課題成績との相関は低い、したがって、仮説2は支持されたとはいえない。この点で、磯崎・黒石(1998)ほど明確ではない。本研究は、単独で課題を遂行するよりも、3人状況で課題を遂行することによって、自己の相対的な位置づけがより明確になり、課題成績と関与度との関連が強まるとの予想のもとに行われた。しかし、結果は不十分であり、3人状況のその他の要因(例えば、競争意識の喚起など)が、結果に影響を与えたかもしれない。

また、要求水準と関与度の関連についてみると、課題実施後の関与度、課題実施1か月後の関与度と要求水準の相関は、それぞれ、 $r=.369$ 、 $r=.302$ であった。これらは、仮説3を支持する方向にあり、要求水準と関与度との間に一定の関連を示している。関与度が高いと要求水準を高く設定し、課題に対して意欲的に取り組むことが示唆される。

関与度に関しては、状況即応的関与と長期的関与を区別して捉えることもできる。本研究では、課題成績が相対的に高かったことによって高められた状況即応的関与は、課題実施1か月後まで比較的持続しているという結果が得られている(表3参照)。その意味で、状況即応的関与が長期的関与に影響を与える可能性が示唆されたといえる。つまり、状況即応的な関与度が高い

と要求水準を高く設定し、課題に対して意欲を見せることになる。そして、状況即応的に上昇した関与度は、少なくとも一定期間持続すると考えられる。

帰属について

表4-1より、悲観主義群は楽観主義群に比べて概して高い成績を示す傾向がみられた。このことは、楽観主義群は悲観主義群よりも高い課題成績を示すという仮説4に反している。こうした結果については、文化差の視点も考慮する必要があるかもしれない。帰属スタイルと関連の深い抑うつに関する研究においても、他の国々と比較して日本の子どもは抑うつ傾向が強いことが示されている(村田, 1993)。日本においては、状況によっては、楽観主義者よりも悲観主義者の方が適応的に機能するということもあり得るかもしれない。また、悲観主義群と楽観主義群の課題成績の差は、次第に縮まる傾向がみられ、第5回では楽観主義群の課題成績と悲観主義群の課題成績とに差が見られなくなっている。このことは、第5回以降も試行を繰り返した場合には、楽観主義群の方が高い成績を示し得る可能性も示唆される。Seligman (1991)も比較的長期的な視点から、オプティミストの優位性を強調しており、これらの点に関しては、より詳細な検討が必要である。

表4-3より、悲観主義群は楽観主義群に比べてGDスコアが低くなっており、悲観主義群は楽観主義群よりも現実的な要求水準を設定するということが示された。これは悲観主義者がより現実的であるとするSeligman (1991)の考えと一致する。しかし、このような傾向が悲観主義的あるいは楽観主義的な帰属スタイルによってもたらされたものであるのか、あるいは悲観主義群は概して高い成績を示すという傾向から生じる課題成績の高低によってもたらされたものであるのかは、本研究で得られたデータのみからでは明確に結論づけできない。この点に関しても、さらなる検討が必要である。

帰属と関与度の関連(仮説5)については、表4-4より、概して課題実施前の関与度よりも課題実施後の関与度の方が高くなっており、課題実施後

の関与度では高成績群で高い関与度が示されている。しかしながら、これは単なる課題成績の高低を反映するものであるかもしれない。そして場面条件と帰属の間に交互作用があることも予想される。したがって、仮説5については、結論づけが難しい。

以上、帰属と課題遂行や関与度の関連については、一定の示唆が得られた。しかし、他者共在効果という点では、必ずしも明確ではない。今後の研究にその検討を委ねたい。

その他の結果について

表5-1や表5-2より、主観的達成度は実際の課題成績をある程度反映していると考えられる。しかし、実際の課題成績と主観的達成度の相関は、 $r=.269$ と低い。このことから、客観的な課題成績の認知と主観的達成度は、課題の遂行において同様の働きをするものの、それぞれは比較的独立した認知成分であることが示唆される。同様に、高成績群・中成績群では低成績群に比べて認知された状況の重要性もやや高くなっている。また、実際の課題成績と認知された状況の重要性は $r=.193$ と低く、状況の重要性の認知は必ずしも課題成績と明確な関連は見られない。

表5-3より、認知された重要性と関与度の関連は弱く、課題実施前の関与度、課題実施後の関与度、課題実施1か月後の関与度と認知された状況の重要性との相関はそれぞれ、 $r=-.058$ 、 $r=.295$ 、 $r=.124$ と低い。ここには、質問項目の意味の違いが存在していると考えられる。

関与度に関しては、対象に関してある状況の下で喚起された個人的重要性和興味の知覚された水準であるという指摘がある (Engel, Blackwell, & Miniard, 1990)。本研究で認知された重要性として扱ったものは前者に、関与度として扱ったものは後者に対応するといえるかもしれない。さらに、具体的な課題遂行においては、認知された重要性よりも関与度の方が重要な認知的成分となるように思われる (表3および表4-4参照)。

課題遂行、要求水準、課題への関与度、帰属の相互関連について

以上を踏まえて、課題遂行、要求水準、GDスコア、課題への関与度、帰属の相互関連を模式的に図示したものが図1である。

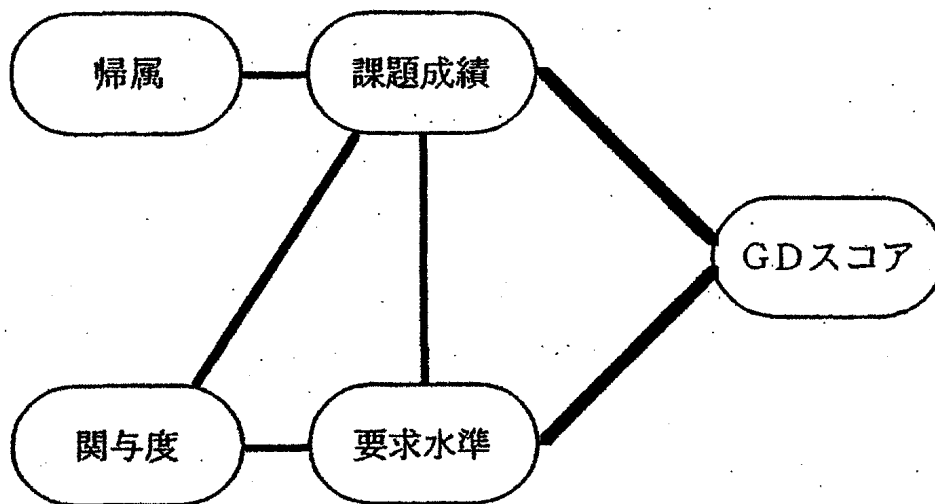


図1. 課題遂行、要求水準、課題への関与度、帰属の相互関連の模式図

すなわち、帰属と課題遂行が密接に関連する。また、関与度が要求水準については課題への態度や取り組みに影響し、要求水準は課題成績と関連を示す。さらに、課題成績が関与度と弱いながら関連し、次回の課題遂行に影響を及ぼす。最終的に、これらの要求水準および課題成績によってGDスコアが規定されると考えられる。

自尊感情の高低によって、成功・失敗の原因の帰属が異なる。すなわち、自尊感情の低いものは高いものに比べて、失敗を内的要因に帰属させやすいとされる (Fitch, 1970)。一般に、成功は失敗よりも内的要因に帰属されやすいが、自尊感情の高いものは、この傾向 (成功を内的要因に帰属される傾向) が顕著である。今後、このような観点を考慮に入れた分析を行うことも重要であると思われる。

これらの結果から、関与度は、ある程度状況即応的な側面を持ち、これによって関与度が高いと要求水準を高く設定し、課題に対して意欲を見せるため、結果的に関与度が要求水準および課題成績に影響する。さらに、状況即応的な関与度は、少なくとも一定期間持続すると考えられる。

引用文献

- Bloch, P. H., & Richins, M. L. 1983 A theoretical model for the study of product importance perception. *Journal of Marketing*, 47, 69-81.
- Engel, J. F., Blackwell, R. D., & Miniard, P. W. 1990 *Consumer Behavior*. Dryden Press.
- Fitch, G. 1970 Effect of self-esteem, perceived performance, and choice on causal attributions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 16, 311-315.
- 帆足喜与子 1961 要求水準と個性 教育心理学研究, 9, 65-74.
- Hunt, P. J., & Hillery, J. M. 1973 Social facilitation in a coaction setting: An examination of the effects over learning trials. *Journal of Experimental Social Psychology*, 9, 563-571.
- 磯崎三喜年・黒石憲洋 1998 要求水準とポシブル・セルフ、自尊感情、課題への関与度の関連について 教育研究, 40, 11-33.
- Markus, H., & Nurius, P. 1986 Possible selves. *American Psychologist*, 41, 954-969.
- 宮本正一 1993 人前での心理学 ナカニシヤ出版
- 村田豊久 1993 小児期のうつ病 臨床精神医学, 22, 557-563.
- Peterson, C., Semmel, A., von Baeyer, C., Abramson, L., Y., Metalsky, G. I., & Seligman, M. P. E. 1982 The attributional style questionnaire. *Cognitive Therapy and Research*, 6, 287-299.
- 佐治守夫 1951 要求水準と現実度 心理学研究, 21, 56-59.

関計夫 1974 要求水準の研究 金子書房

Seligman, M. P. E. 1991 *Learned optimism*. New York: Knopf. (山村宜子 (訳)

1994 オプティミストはなぜ成功するか 講談社)

高木貞二 (編) 1958 心理学研究法 岩波書店

Tesser, A., & Campbell, J. 1982 A self-evaluation maintenance approach to social behavior. *Educational Psychologist*, 17, 1 -12.

Tesser, A., & Campbell, J. 1983 Self-definition and self-evaluation maintenance. In J. Suls & A. Greenwald (Eds.), *Social psychological perspectives on the self*. Vol. 2. Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Zajonc, R. B. 1965 Social facilitation. *Science*, 149, 269-274.

**Relationships among Task Performance, Level of
Aspiration, Task Relevance
and Attribution in the Presence of Others
(English Résumé)**

Mikitoshi Isozaki

Norihiro Kuroishi

Past research examining the relationship between level of aspiration and the performance on a task indicates that the relevance of the task to one's self-definition relates to the performance of the task. This implies that the more relevant the task is to the subject's self-definition the harder he will work on the task. Conversely, the harder he works, the more relevant the task becomes. Task performance and level of aspiration are also determined by one's attributional style such as "optimism" (Seligman, 1991) and situational factors such as the presence or absence of others.

The present study examined the relationships among task performance, level of aspiration, task relevance, and attribution in the presence of others.

It was expected that there are some relationships among task performance, level of aspiration and task relevance, and the performance of the optimistic subjects is superior to that of the pessimistic subjects.

Method

Subjects were thirty-six (6 male, 30 female) undergraduate and graduate

students. The subjects participated in the present experiment in a triad and performed individually the task in a co-action setting and completed the questionnaire. They were acquainted with each other.

The experimental task involved a series of "Small-Big" classification tests (Takei Co.), in which subjects were required, within one minute, to classify 50 metals into a box with 5 slots of different sizes. The questionnaire consisted of four parts: (a) task relevance scale (e.g., Are you interested in this task?), (b) level of aspiration scale, (c) attribution scale, (d) subjective rating scale on the task performance.

Results and Discussion

1. Statistically significant correlations were found between the performance on the task and the level of aspiration ($r=.810, p<.01$), and between the relevance of the task to one's self-definition after having finished the task and the level of aspiration ($r=.369, p<.05$). On the other hand, a significant correlation was not found between the performance on the task and the relevance of the task to the subject's self-definition. It was suggested that the subjects were competitive in the presence of others.

2. The performance of the optimistic subjects was not as good as that of the pessimistic subjects, and the GD (goal discrepancy) score of the pessimistic subjects was lower than that of the optimistic subjects. These results suggest a cultural variation between the performance of the task and the level of aspiration.